

名古屋俘虜収容所の2回の俘虜製作品展覧会

校條 善夫 (Yoshio Menjo)

はじめに

青島戦の俘虜収容所の紹介事項には、どこの収容所も俘虜は収容所で暮らしていた間に俘虜製作品展覧会を開催し、絵画、模型、設計図、日用品など各自の得意分野のものを製作し展示している。日本人に公開し、有料で製作品を販売した。俘虜抑留中に各自が思い思いの発想と興味で製作に打ち込めた環境があったことは、特筆すべきことではないかと思われる。これを一時の偶然と考えるよりも、こういう環境が当時どこの収容所にも用意されることができた事実注目したい。

これは青島戦時代の特徴であるが、まずは日本側に人権尊重のベースがなければ、実現しなかった。それは外向きの必要性から生じたものなのか、どこまで本物の自覚と理念があったかは断言し難い。一つは日本側の事情でいえば、多分に日本のナショナル・インタレストから要請された部分があったと思われる。次に俘虜側にしてみれば、人間主義的な創意と能力の自由な表現に対する自己体験の喜びである。青島戦の底辺には、こういう時代の流れが存在していたことに注目したい。第一次世界大戦では、どこでもそうだったということはない。日本におけるドイツ兵俘虜の収容体験に特徴的にみられた事実として記憶すべきことと認識している。ドイツは日本にとって文明と文化の先進国で、近代国家としての「教師役」でもあった。日本が先進欧米諸国に対して「一等国」「紳士の国」としての認識を求めていたことも、その背景にあった。

青島戦と名古屋俘虜収容所

青島戦とはなんのことか。初めて知る人も多い。第一次世界大戦以前から中国の遼東半島の青島はドイツが植民地として所有し軍隊を駐留させていた。第一次大戦の舞台はヨーロッパであったが、アジアの一角の青島がドイツの權益

下にあったので、英仏露などにとっては、青島はれっきとした敵国の一部であった。大戦当初日本は静観視していたが、イギリスからの参戦勧誘や日本自体の国家的利益（アジア進出意図）などの理由からドイツに宣戦布告した。特にイギリスはドイツの潜水艦によって商船が撃沈され被害が大きくなった。当初イギリスは日本海軍の出動を要請してきたが、日本はその要請に乗じて師団編成規模の日本軍を青島に派遣した。ドイツ軍を約3か月で攻略し中国とアジア進出への足がかりを確保した。約5千名のドイツ軍に対して日本軍は師団規模の軍隊を派遣した。最初から勝敗の行方は明白だった。約3か月で終結した。陸軍省などの公式の名称は「日独戦争」であるが、一般には「青島戦」で語られている。特定地域の戦争ではあったが、日独双方に多数の犠牲者が出ている。悲しむべき事実であり、かつ冷静に思慮することに価値を言うまでもない。

ところで名古屋へ来た俘虜は当初3百数十人であった。名古屋市中区の東別院本願寺が収容施設となった。ここは先の日露戦争の時に収容所として使用されたところである。その後徐々に俘虜は増えてきたので、翌年の大正4年9月には東区新出来町の陸軍用地、現在の愛知県立旭丘高校の敷地に俘虜専用の収容施設がつくられ移転した。最終的には日本全体で約5千名の俘虜が日本にきて、そのうち約5百名が名古屋の収容所に抑留された。

来日した青島戦の俘虜は、どこでも概して人道主義的な待遇をうけ、収容所内の生活では一般に「捕虜」という言葉から想起される悲惨な暮らしではなく、「俘虜」という言葉から印象づけられる、温情主義的な待遇をうけた。飲食に困ることはなく、スポーツや音楽演奏なども楽しんだ。近くの観光地への旅行も楽しんだ。青島戦の俘虜の実態については、収容所ごとに著書や論文などで紹介されているので参照されたい。名古屋収容所については、ドイツ館発行の年刊誌『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』に拙稿を8編、名古屋市東区郷土史研究会編発行の不定期刊誌『ひがし』に2編掲載しているので参照されたい。

1. 名古屋の俘虜製作品展覧会は2回開催

1-1. 最初の展覧会

名古屋では2回俘虜製作品展覧会が開催された。最初の展覧会は大正6年3

月15日から31日まで愛知県商品陳列館で開かれた。しかし出品数や観客動員数の多さなど話題性のある展覧会は、大正8年に開催されたものであった。大正6年の行事は名古屋新聞と新愛知が展覧会初日の3月15日の朝刊で記事にしているだけである。肝心の名古屋俘虜収容所全期間中の総括記録文書『名古屋俘虜収容所業務報告書』（大正9年4月）には大正8年の展覧会のことは記録されているが、大正6年の行事は全く記録されていない。その理由を推測すると、大正6年に所長が交代していることや収容所初期のことだったことなどが考えられる。最初の林田一郎陸軍中佐が所長時代は収容所の管理運営が厳しかったといわれている。それは所長の性格のためだったのか、あるいは最初だったので俘虜の取扱に慎重にならざるを得なかったのか。断言し難い。収容所の「初仕事」となれば、どうしても慎重にならざるを得ない。俘虜の製作品展覧会もその例外ではなかったと推測できる。

名古屋の最初の展覧会は、前述したように大正6年3月15日より同月末まで名古屋市内の愛知県商品陳列館で開催された。収容所の軍部自体がどの程度展覧会開催に関わったのか。その記録はない。しかし俘虜の身分では自由に展覧会など開催することはできない。何らかの軍の許可と指示があってこそそれは可能となる。そういう点を考慮すれば、アクションは収容所から発信されている。名古屋で展覧会と称される行事についての陸軍の記録では、帰国の年の大正8年6月22日～30日までの展覧会だけが『業務報告書』に記録されている。そして名古屋新聞と新愛知の3月15日の記事だけが、最初の大正6年の展覧会の様子をうかがい知る唯一の情報である。この記事の概略をまとめると、およそ次のような様子だった。



展覧会場だった愛知県商品陳列館

(『明治の名古屋・世相編年事典』泰文堂 昭和43年)

1-2 大正6年の展覧会を報道した新聞記事の要約

名古屋新聞の記事（大正6年3月15日）：見出しは「俘虜君の製作品展覧会—十五日より陳列館で」である。記事は「出品された製作品の数は、約50点位であった。中でも記者の目を惹いたのは、ヘルマンという俘虜がつくった軍艦の製作品だった。製作品は全て空缶や荷箱の板を材料にして食用ナイフで作ってあった。中世の城には鎖付きの橋が架かっていた。現代の鉄橋を渡る蒸気機関車、飛行機射撃用の装甲自動車など、廃品をうまく利用して『科学的』に製作されている。葉巻煙草の空箱を利用したものもある。根気の良さがうかがえる。飛行機無線電信機や瓶の中に帆船模型を入れたもの（ボトルシップのことか）もあった。平和を希望する絵葉書もあった。これらの製作品は帰国の時に故郷への土産にするとか。また故郷の小学校へ寄付をするつもりだという絵も数点あった。」

新愛知の記事（大正6年3月15日）：名古屋新聞とよく似た内容であるが、新愛知の方がより具体的でわかりやすい。資料がない中での貴重な記録である。概要を紹介する。（記事の中のカタカナ名は新聞記事の原文通りである。）

見出しは「商品陳列館の俘虜作品展覧会～今月中開会」である。本文は「ドイツ人が物事に緻密で器用であることを一般に知って貰うために、その参考に供したいと、ドイツ俘虜が製作した手工品を借り受けて陳列することになった。ヘルマン上等兵は缶詰めの空缶で汽車と鉄橋を製作した。フリードリッヒ・ライザーは中世の城と飛行機射撃用装甲自動車の模型を製作した。パウル・エベルトはタバコの空箱で寄木細工を製作した。絵画ではゼルハイムの油絵の肖像画と福岡湾の絵があり、リマチェンホークの水彩画とスイスの風景。ギリシャの神殿などは玄人を凌ぐ巧さである。出品された絵の中の『青島を占領されたことは忘れられない』という水彩画は収容所に没収された。他に本国から送られてきた絵葉書もあった。その一つに可愛い子供が空の一角を悲しそうに眺めている絵があり、その絵葉書には『私のような何にも知らない小さなものでもこの戦争は本当に悲しいことだと思います』と、書いてあった。他の一枚には『神様どうか早く平和にして下さい』とあった。いかにドイツが一日も早い平和を望んでいるかがわかる。まだ製作中のものがあるが、出来次第陳列される。指先の器用な日本人も一寸真似できないほど精巧を極めたものである」。

この二つの新聞記事は展覧会初日の朝刊であるので、前日に記者達に事前に取材させたものと思われる。大正6年3月の展覧会開催中や閉幕後の記事はないので、入場者数や期間中の様子は皆目わからない。しかし一般市民には珍しく興味深い製作品展覧会であるので、かなりの集客力と話題性はあったと思われる。名古屋新聞の記事からみると、記者でさえまだ「ボトルシップ」を知らず初めて見た感想を率直に書いている。また両新聞とも当時のドイツの科学技術だけでなく、絵画など芸術一般のレベルの高さに感嘆していたと推測できる。当時の市民からみると科学技術や芸術全般にわたってレベルの高い展覧会だったことがわかる。この記事以外に展覧会の動静が新聞に登場しなかったのは、俘虜の特技や知的感性的レベルの高さを日本民衆に知られたくない、という軍部の思惑があったのか。俘虜取締規則では特別に許可した場合を除いて日本人との会話を禁止していたので、軍は展覧会来場者との会話を危惧したためか。

当然この大正6年の最初の展覧会も詳細に報道されて『業務報告書』などに記録されるべきであった。それにも拘らずそれが記録されていない。今の時点ではその展覧会の内容の詳細や日本人観衆の具体的な様子はわからない。俘虜の動静については日本人には知らせず、記録を残さないという方針であったのか。陸軍は新聞各社に対して情報統制を勧告していたのではないかとさえ思われる。それは名古屋だけに限ったことだったのかどうか。『業務報告書』が編集発行された時は、二代目の收容所長中嶋仙之助陸軍大佐の時期であった。推測すれば、前任者時代のことは「手を触れない」ことだったのか。あるいは誤報や舌足らずの欠陥記録になるのを恐れて避けたのか。前述したように新聞記事は僅かに1回のみである。また俘虜側で独自に編集発行した報道出版物もいまのところ見当たらない。

その点ではこの稿の後半で紹介する大正8年の中嶋所長時代に開催した展覧会の詳細な報告とは対照的である。

2. 二つの展覧会の底辺では共通項があった

大正4年の新聞記事をみると興味深い俘虜收容所の様子がわかる。收容所特有で共通の心理状態の存在が浮かび上がってくる。それは收容所も俘虜も自由時間を活用し俘虜の退屈感を解消する策を潜在的に求めていたようにも理解できるからである。また俘虜の製品製作や工作技能の優秀さを広く市民に知らせ

たいという、収容所側の意図もあったかと推測できる。これらの兆候は二代目の中島所長当時の考えや意図と底辺では一致するものがあった。特定の社会環境下の人間社会的一幕をみるようである。筆者がこの理解にたどりつく契機となったのは、大正4年5月4日の新愛知の記事である。大正4年5月4日は収容所が開幕して約半年が経過した時期である。記事の見出しは「**俘虜達は手製の安楽椅子で～書を読んだり昼寝をしたり～**」と書いてある。来日6か月位経過し、最初の展覧会の約2年前である。収容所はまだ東区の新設の収容施設に移る以前で、中区の東別院にあった時期である。記事は「手先の器用な人間が沢山いてビールの空箱などを壊して色んな道具を作る。・・・机まで拵えているそうだ。・・・一人の俘虜は飛行機の模型を作った。・・・プロペラの具合といい、全体の恰好といい流石に巧いものである。風車などを拵えて風がくるくとまわる。・・・将校の中には漢語を操ったり、漢語を書いたりする者もいる。日本語で『カチューシャ可愛や』を唄うものさえいるそうだ」。

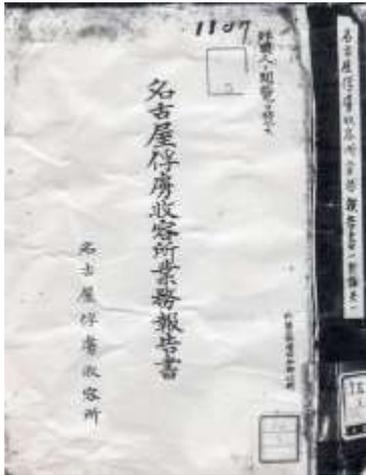
この記事が書かれた時期から、既に俘虜は退屈感に悩みその解決法として器用な手先と頭脳の上手な使い方気分を和らげ癒していたことがわかる。展覧会の開催成功のベースは、実はこれだったことがわかる。後でも紹介するが大正8年の展覧会開催の動機には、一つは収容所の慰問見学が多くなり、その対応の繁忙さを解消するためであった。二つ目には前記のような俘虜の退屈感の解消である。三つ目には俘虜の高い技能や広い知識を一般に周知させることであった。その根拠は『業務報告書』の中に記述されている。

大正8年6月の展覧会～『業務報告書』の記録

次に『業務報告書』に記載された大正8年6月の展覧会についての記録を紹介する。ここでいう『業務報告書』とは、正式には『名古屋俘虜収容所業務報告書』と称し、名古屋俘虜収容所名で大正20年4月1日に発行されたものである。この文書は収容所側が記録した詳細かつ広範にわたる事実を記録した貴重な資料である。他の収容所には同類の資料は見かけないと聞いているがどうか。ここでは一部省略して『業務報告書』として記述している。

ところでこの展覧会については、名古屋新聞と新愛知の日刊新聞の記事があり、また俘虜だったヘルマン・フォイクトレンダーの展覧会報告がある。これらは後述するが、この展覧会は収容所主導で企画され実施されたことがわかる。

以下はまず『業務報告書』の要約である。（要約のうち原文通りの文章にはカッコをつけた。）



名古屋俘虜收容所業務報告書（大正9年4月1日）

（名古屋市政資料館所蔵）

3-1 收容所側の発案で開催（『業務報告書』）

この展覧会は、俘虜の製作品展覧会であるので俘虜側の発起による俘虜主導の行事のように解釈したいが、実はそうではない。この展覧会は收容所側の動機というか発起によって動き出した。この点は他の收容所と同様だったのか、違っていたのかはわからないが、名古屋の『業務報告書』を見ると、收容所の日本側の動機によって事は始まったことがわかる。これは一見奇妙な印象を抱くが、その動機を知ると「なるほど」と納得できる内容である。

『業務報告書』が記録している動機とは、実は年々日本人の收容所への見学者や慰問者が右肩上がりに上昇し、その対応や準備に收容所側は対応しきれなくなってきた。特に抑留年月が長期（5年間）になる大正8年以降は見学者や慰問者の数は大変多くなり、通常の業務は多忙さが加わり、支障をきたす事態が生じてきた。『業務報告書』は訪問者を見学者と慰問者の二通りに分けてい

る。見学者が多い月は1か月に533人（5月）、460人（6月）、342人（8月）と多い。さらに見学を兼ねた慰問者数の統計では婦人会やキリスト教信者の230人（6月）、キリスト教信者だけの200人（10月）そして下の写真で見ると婦人会だけの150人（12月）という記録になっている。収容所では見学慰問者に対応する専門の兵士をおいているわけではないので、その多忙ぶりは想像できる。



新聞社主催の慰問訪問団を迎える俘虜達（俘虜遺族の提供）

この煩雑さを緩和する一方、来訪者を満足させるために考えついたのが俘虜製作品展覧会だったと、『業務報告書』は記述している。開催のメリットは、

1. 来訪者に満足感を与えることができる。
2. 収容所の業務の繁忙さを一時期に限定できる。
3. 俘虜の特殊技能の優秀さを地方政治家、教育者、商工業者等に周知できる。

以上3つのうち、2の繁忙さの解消が最大の狙いであった。これら3つの効果を期待しながら大正8年6月22日より9日間、当時の愛知県商品陳列館で開催することを決めた。来訪者には見学観覧の他俘虜製作品の購入もできるようにした。

3-2 準備（『業務報告書』）

開催の発起人が収容所自体であったので、準備活動も収容所側が率先して行動に移していた。開催規定を決めて俘虜将校2名を担当者とし、その下に俘虜の準備委員5名を選んだ。彼らは材料や製作用器具の購入、完成した製作品の整理や運搬、会計事務や会場の設備の設営などを担当業務とした。

この辺の事情は名古屋収容所の情報将校ヘルマン・フォイクトレンダーが次のように報告している。当初俘虜は長期の抑留生活で気持ちが消沈し元気を失っていた。しかしその頃収容所側からいわば独断で一見強制的ともとれる展覧会開催の勧誘があった。その結果俘虜側はだんだんと「やる気」を起し元気になっていったとフォイクトレンダーはいう。『業務報告書』ではそういう俘虜の気持ちの変化などには全くふれてはいない。俘虜側のこの心境の変化は、『業務報告書』には全く記述がないのでわからない。これこそフォイクトレンダー報告の特長の第一というか、我々が彼の報告から知りうる最も注目し、評価したい視点である。

展覧会開催成功の裏には所外から開催応援の申出があったことがあげられる。当時の商業会議所会頭であった「いとう呉服店」の伊藤守松社長は、展覧会出品製作品の材料器具など必要な購入費の前金として300円を前渡した。今の貨幣価値に換算すると、どのくらいになるのか。かなりまとまった金額だと思われるが。また名古屋電気鉄道（後の名鉄）は乗車回数券52回分を10冊寄贈し、俘虜が収容所と会場との間を往復するために利用できるよう便宜を図った。俘虜が収容所で製作した製作品を会場に運ぶために、服部紡績（後の興和化学）と「いとう呉服店」はそれぞれトラック1台を3日間無償で貸与した。

3-3 製作品出品状況（『業務報告書』）

『業務報告書』には出品製作品の説明がある。製作品の陳列は製作品陳列室と参考陳列室の2部屋であった。製品陳列室には販売を目的とした製作品が並べられた。報告書によれば、陳列室は2部屋あって製作品陳列室と称した部屋には主に来館者が購入できる製品を並べた。その部屋には絵画90点、機械器具の模型56種、木製の家具、装飾品、玩具、化粧品等123種、手工品23

種、似島俘虜収容所（広島市の南の島にあって、この年3月に展覧会を開催）からの出品5種がある。またもう1つの部屋である参考陳列室には販売品と非販売品の両方の製作品が並んでいた。ここでは設計図が24種、機械が3種、ドイツ人の生活参考品やドイツの各種の統計表が並んでいた。製作品の陳列とは別に演奏室ではドイツ音楽の演奏があった。売店を設置し俘虜が料理した一品料理を俘虜が販売していた。日本人経営の商店では（ドイツ風の）パン、ケーキ、飲み物、腸詰「ハム」を売っていた。



会場警備する日本軍兵士と来場者達（名古屋新聞大正8年6月24日）



会場警備する俘虜（水兵）と来場者達（名古屋市博物館所蔵）

3-4 来館者（『業務報告書』）

期間中に来館した人数は、約10万5千人だった。「来館者の主な職業と職

域は、軍人、地方自治体の首長や議員、医師、僧侶、神官、教育者、学生生徒、実業家、商工農の自営業者などの団体や個人である。東京や大阪など遠方よりの来客も多かった。来館者には『名古屋俘虜収容所概要』と『同俘虜概況表』の2冊一組を配布した。展覧会場は終日満員であった。名古屋陳列館開設以来空前の盛況だったので、この大観衆のおかげで売店や交通機関は予測しない程の収益をえた」と、伝えている。

3-5 展覧会の終了と成果（『業務報告書』）

「展覧会の会期を延長してほしいという希望があったが、たまたまベルサイユ講和条約締結が6月28日にあり、収容所の事務繁忙の懸念もあったので予定通り30日で閉幕した。閉幕後2日間は会場の整理や諸経費の清算にあてた。出品した俘虜や協力者は一人平均25円前後の収益だった。この収入は講和条約締結の知らせと重なって俘虜は大いに気をよくし、収容所職員に感謝の言葉をかけていた。展覧会は、ドイツ人の簡単ではあるが栄養に富んだ食事生活、優れた技能や知識、緻密な頭脳、勤勉実行の精神等が紹介された。地方政治、教育界、実業界は勿論、個人の家庭生活にも大きな刺激を促し、ドイツ人の優れた技能や専門的知能を学びたいという風潮が、特に実業界に巻き起こった。

期間中の総売上は6千9百円余であった。その内訳は、俘虜製作品3、724円40銭、俘虜の一品料理566円63銭、菓子502円65銭、腸詰481円54銭、パン類1、515円00銭、絵葉書157円85銭で総計6,948円07銭であった。」

『業務報告書』はこれに続いて「其他尚展覧会出品目録、俘虜記念絵葉書及閉会后ノ残品等ノ売上高ヲ合算セバ優ニ総計八千円を超エタリ」と、記述している。開会中と閉会後の売上高は総計8千円を超えた。そして収容所職員は、終始会計事務を見守り販売による暴利がないよう注意していたと、記している。

以上が『業務報告書』に記録された展覧会の報告の概要である。『業務報告書』には以上の本文とは別に別冊の附録があり、その中に「俘虜製作品展覧会規定」が掲載されている。購買上間違いを起こさないための詳細な規定が作られている。例えば購買希望者が決まれば、それとわかる規定の付箋をつけてお

くとか、俘虜の担当係の区別がわかる腕章をつけるとか、展覧会という慣れない行事を円滑に運営するための細かい規定になっている。

4. 二つの展覧会の共通点

名古屋では大正6年3月と大正8年6月の2回俘虜製作品展覧会を開催しているが、第1回とか第2回という呼称はしていない。両者の開催はその時独自に企画した展覧会であったからである。前述したように収容所長が途中で交代しており、二つの展覧会の間には特に関連性はないが、開催の必然性というか、開催理由には展覧会開催の動機や理由に共通したものがあつたと考えられる。それは見逃せない収容所の生活実態を反映しており注目する価値がある。



名古屋城を描いた展覧会の絵葉書（名古屋市博物館所蔵）

結論をいうと、それは2つの要件が揃っていたことになる。1つは収容所内で俘虜は手持ち無沙汰で退屈感に悩んでいた。その解消や緩和の方法はみつからなかった。2つ目は俘虜にはもともと優れた技能があり、製作活動に潜在的な意欲があつたが、それを発揮するチャンスがなかった。この2つは俘虜の胸中の底辺に流れていた。展覧会はその2つの不燃焼部分に点火し燃焼させた。展覧会開催によってこれまで悶々と日を送っていた気持ちを解消することができた。しかも見逃せないことは、収容所開設初期から俘虜の退屈感の悩みとそ

れを解決したい意欲があったことである。次に日刊紙が伝える報道の要約を紹介し、展覧会の概要を理解したい。

展覧会の様子を報道する新聞記事

大正8年の展覧会を報道した名古屋新聞と新愛知の記事

大正6年の展覧会の時と比較すると、今回は記事の頻度と情報量は格段に多い。他の収容所が開催した後でもあって情報開示に対する警戒感も薄らぎ、俘虜の熱意も盛んになっていた。内容は前回と比べると格段に充実していた。しかし俘虜との接触は依然として警戒された。その方針が変わらないのは印象的である。

1：名古屋新聞（大正8年5月24日）—実用品販売をPR

展覧会は6月22日から始まったが、そのほぼ4週間前に予告の記事を出していた。見出しは「**俘虜製品展覧～6月下旬より陳列館に**」である。記事は「今回の展覧会は一般実用品を主としてパン缶詰等の食料品をも陳列し展覧品は総て売約すべし」と。製品の展覧だけではなく実用品の販売を紹介し、一般の関心をひきつけたと思われる。

2：名古屋新聞（大正8年6月1日）—製作品販売や音楽会をPR

この記事は3週間前の予告記事になる。見出しは「**俘虜が製品を売出す～商品陳列館でこの22日から俘虜製作品展覧会～**」である。記事は「何れも不十分な材料を以てやったものとは想像が出来ぬ程で極めて巧妙に出来上がって居る。展覧会の開会中俘虜の製作になるパン、カステラ、ハム、アイスクリーム等の即売をする。俘虜自らが製作製法を見せそして売るそうである。この外毎日俘虜の音楽会を催して一般公衆に聞かせる筈である」と。前の記事と同じく製品の販売の記事にしているが、ここでは製品名を具体的にあげている点が目立つ。

3：名古屋新聞（大正8年6月20日）—中嶋所長がマナーの厳守を強調

展覧会の開会を2日前にした予告記事である。見出しは「**今回の俘虜製作品展覧会は頗る大規模**」。記事は前半で展覧会の内容周知を狙った新聞記事らしい記事である。後半はまるで収容所の広報を代行するような記事になっている。記事は展覧会開催にあたっての収容所の態度表明を代弁している。中嶋収容所

長が鶴舞での公開音楽会開催を決意した時、やはり新聞記事で「俘虜との接触は自重してほしい」と、収容所の立場から態度表明を宣言している。



演奏する俘虜の楽団と来場者達（名古屋市博物館所蔵）

ここでもそれと同じ警告調の記事内容である¹。簡単に言えば「一般市民は俘虜に一切声をかけるな。話をするな。もしそれがわかれば収容所の責任になり、俘虜を処罰することになる」という警告である。こういう厳格な規律順守の言動は、名古屋収容所が唯一かどうかは別として独特の言動のように思われるがどうか。これは決められた規則規律に忠実な軍人精神の発露という一面ではあるが、多分に上部機関の衛戍司令部を強く意識した言動と解釈される。この時だけの言動とはいえ、公開音楽会の時もそうだが、民衆との接触が予想される場合には同じような俘虜と民衆との接触不可の警告が出る。四国の徳島や板東での様子と比べると、名古屋収容所独特の言動だったように思える²。

¹ 名古屋俘虜収容所の「俘虜製作品展覧会規定」の中の「会場内ニ於ケル取締法」に「所員ハ俘虜ノ取締及警戒ニ関シ・・・非違ノ行為アラシムベカラズ 又俘虜ト俘虜以外ノモノト接触ニ関シテハ特ニ「細心ノ注意ヲ払ウベシ」と、強調している。

² 本研究誌の第12号（2015年3月）掲載の南川慶二氏の「よみがえった『徳島エンゲル楽団—エンゲル・松江記念音楽祭15年間のあゆみ—』によれば、「俘虜から指導を受けたいと松江所長に願出た。その結果、許可を得てエンゲルが指導することになった」（同誌50頁）と、収容所長レベルでの承認で許可されたと記述されている。この事情は名古屋の「いとう呉服店」の社長から申請された結果とは対照的な結果である。両者の差異は師団長を経て陸軍省まで申請したのか、その一方そういう措置を省略したのか、その差異の結果だと判断できる。

この点でこの記事に高い関心を抱くし注目しておきたい。その理由には名古屋は監督機関である衛戍司令部が近くにあり、常にそれを意識せざるを得ない事情があったことが大きかったのではないか。このことを記事にしている6月20日の記事を次に紹介しておく。

4：名古屋新聞（大正8年6月20日）－展覧会の説明と収容所長の説明を代弁－

記事はまず展覧会は大規模であることや俘虜の特長を認知できると書いている。開催の動機は俘虜側の自発的な意思からではなくて、実は収容所側が手不足のまま押し寄せる見学者や慰問者との対応に「手をやいて」おり、困惑の果てに思いついた展覧会だったと、正直に記事で伝えていることは注目される。また記事で展示品を紹介している。

- (1) 小家具、文房具、装飾品、模型、化粧品、絵葉書
- (2) 美術品（油、焼き絵、ペン、水彩の各絵画）
- (3) 参考品（機械、模型、図案）
- (4) 食料品

この記事の後段では、俘虜との接触厳禁の規律を「広報」し、新聞記事を通して収容所の方針を代弁させている。記事は次のように観覧者のマナーについて記述している。

「観覧者に対する心得としては、譲与申込の外俘虜に対して談話は勿論身体に触れる等の事なき事、・・・勿論必要以外には会話をせざる事・・・」と、俘虜との接触を警戒している。この注意書きは、公開の音楽会の開催や音楽指導を敬遠した時の軍部の態度と共通している。俘虜との接触は固く禁止されていることは、収容所開設以来の規則であるので、事あるごとに強調されていた。この場合は新聞記事を借りての申し渡しである。さらに中嶋収容所長の言葉として次のように紹介している。

「近来俘虜の研究熱が沸騰し収容所見学希望の申込が非常に多いけれど収容所は特殊の物故に無制限に開放する事は（収容所が多忙を極めるので）不可能である。されば此機会（展覧会）を利用して製作品以外に俘虜の日常起居に関する物品類生活常態の絵画写真並に各種統計など陳列する事となった」と。ここを平たくいえば、収容所は日頃の繁忙を緩和するために展覧会を開催する

ので、収容所の見学や慰問を遠慮してほしい、という収容所の希望を述べたことになる。さらに収容所長としての立場から「若干でも利益があったら（参考になれば）本会の喜びである」と。また収容所職員の協力を労い、会場となった商品陳列館の職員や名古屋市実業界が「多大の便宜」をしてくれたことは「喜悅にたえない。云云」と。記事を通して収容所長自ら謝意と慰労の気持ちを表明している。

以上がこの記事の概要である。収容所は俘虜と市民との接触や交流を厳しく警戒したが、他の収容所ではどの程度あったのか。展覧会開催に至った動機や契機については、収容所は見学や見舞の訪問者のために業務が大変繁忙になっていると、この新聞記事を通して正直に説明している。この点も印象深い。

5：名古屋新聞（大正8年6月23日）開催初日の取材記事の要約

展覧会初日、会場を訪れ見聞した翌日の記事である。見出しは「精巧、堅牢の品のある俘虜作品展覧会—蛇皮で作った珍奇なステッキ／カフェーや菓子店もあって大賑合い」。会場の説明は「絵画部、設計図之部、器具、機械、模型之部、木製品玩具之部、手芸品之部、似島俘虜収容所出品之部に分かれ凡そ三百点が陳列してある」。「設計図の方は素人には向かないが、その道の人々には興味深く感じられるに違いない。模型の部では、先ずヨットの模型が目につく。出品にはドイツらしい臭いが窺われる。手綺麗というよりも実用的で堅牢である。何とも落ち着きがあって好い感じだ。ヨットの外、婦人の鬘、写真拡大機、単筒蒸気機関、蒸気槌、家庭洗濯機模型、気圧表示機、単葉飛行機模型、一馬力高低圧併用機関など目先の変ったものが並べてある。これを見ても彼等が囚われの数年間にも常に研究と努力を忘れず、一刻も眠っておらず、常に生き生きとしている。その頭脳がいかにも科学的であり統一された様子が一打の槌、一削の鑿の跡に窺われる。・・・陳列品全部売品で即売品も中には沢山あるが、第一日でも最早数十点の売約済札がついていて頗る盛況である。・・・毎日午後二時位から俘虜の管弦楽、声楽が行われる事になっている。尚俘虜が市外中村にあった日清製粉で焼いたドイツパン、及び屠殺場で製作したドイツ流の腸詰その他菓子なども販売している。そしてミルクホール式に片隅のテーブルではカフェーや菓子や、パン、腸詰などの試食も出来る様になっ

ている。」³



展示されたボイラーの模型と住居の模型（名古屋市市政資料館所蔵）

³ドイツパンは俘虜が教えた「桜パン」（後の「敷島パン」）も出品していたが、ここで記事になっているのは「日清製粉」だけである。その理由を推測すると、当時は食糧難が叫ばれ米騒動が名古屋でもあり、焼打ち事件や大衆蜂起があった。米に代わるパンの需要の世論が大きくなった。日清はドイツのランツ式蒸気エンジンを輸入し近代的な工場経営で食パンの大量生産が可能だった。就労していた俘虜は日本人好みの食パンを作っていたという（名古屋新聞 大正8年5月1日）。市民の間で日清の食パンの評判が高かったためだったと推測される。因みに名古屋での最初のドイツパンは市内東区に加藤庄吉商店のパンだった。例のフロイントリープが指導したパンで評判もよかったといわれる。しかし加藤商店は当時店内の内紛により閉店になっていたためパンの出品はしていなかった。（『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第6号 21頁拙稿参照）。

またドイツ流の腸詰は、俘虜が名古屋市西区押切の市営屠殺場へ就労して指導していた。その関係の製品が販売されていたと思われる。但し就労した人名や年月日などの正式記録はないが、就労していた記録は存在する。（『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第6号 37頁拙稿参照）

6：新愛知（大正8年6月23日）初日の取材記事の要約

名古屋新聞に比べて新愛知は、この展覧会の記事はどういう訳か少ない。この日の記事は名古屋新聞の記者と同じく開催初日に会場を訪れ、初日の模様を取材し報道している。会場の説明は、名古屋新聞の記事とほとんど変わったところはない。但し名古屋新聞が書いているような収容所長の俘虜監視上の警告の言葉や観衆の心得などは全く記述していない。新愛知は俘虜と観衆との接触厳禁の件について認識が薄かったのか。報道価値の認識の差異があったのか。あるいは新愛知への情報提供（依頼）はなかったのか。両者の報道の差異について関心をひくが真相はわからない。



展示された蒸気機関車の模型と祠の模型（名古屋市市政資料館所蔵）

新聞社2社の違いを探せば、俘虜の音楽演奏の時間の違い位である。名古屋新聞は「午後2時位から」としているのに対して、新愛知は「午後1時から」と書いている位である。このごく単純な時間のことがどうして違うのか。単純な疑問だけに気になる。両紙の記事の差異がこれほど大きいことは何故なのか。本論自体とはあまり関係はないが、マスコミ論やジャーナリズム論などの分野では、興味をひくテーマであろう。

次に名古屋俘虜収容所の情報将校F・フォイクトレンダーの報告を紹介する。俘虜の私的通信は日常の身の回りのごく限られた範囲のことしか許されない。軍の検閲という関門がある。収容所の「俘虜心得」の「郵便物」の項では、「総

ての発受郵便物は監督将校に於いて検閲す」「総て検閲を免れて発信せんとする行為あるべからず。この行為は特に厳罰を以って処分す」と、厳しい規則を決めている。通信内容によって段階はあろうが、検閲を無視することは当然処罰の対象になる。しかし俘虜でも将校と下士卒との間には大きな差別があった。一般に規則違反で下士卒は重営倉になるが、将校の場合はその処罰の程度が極端にゆるく精々訓戒の程度ですんでいる。フォイクトレンダーの階級は予備役少尉で、しかも情報担当であったので通信物検閲は「検閲省略」であったかも知れないと思わざるをえない。他の収容所の事例はどうであったのか。彼はこういう特典を生かして、彼自身の報告以外に他の俘虜作成の報告を独特のルートを経て本国へ送信している。その「独特のルート」とは収容所へ出入りしていた東京の牧師の手を経て本国へ送るルートであった。以下は彼の報告書の全文である。

名古屋俘虜収容所製作品展覧会—1919年6月22日より30

日まで

以下の報告は、ドイツ兵俘虜の情報将校（予備少尉）ヘルマン・フォイクトレンダー氏の報告である。報告書は密かに東京のドイツ人牧師シュレーダー氏を経由して本国へ郵送され、フォイクトレンダーの遺族が公開を承諾してドイツの俘虜研究者ハンス・ヨアヒム・シュミット氏（Hans-Joachim Schmidt）のサイトで公開されたものである。

後述（27頁）でもこの報告の意義を扱っているが、ここでもまずはこの手記の意義について述べておきたい。通常日本人の目に入るのは、日本の新聞記者が書いた記事か、軍の当事者の記録文書である。ここで紹介するものは、日本側では感知しえないドイツ側の俘虜が実体験した手記である。俘虜の手記は本来日本軍の検閲を要する。もし無検閲の文書であれば、正に処罰ものであるが、当事者が将校であったことや闇のルートがあってドイツへ届けられた。幸い今日陽の目をみて公開された貴重な記録である。内容的には特に俘虜の心理、気持ちの変化が描写されている。この手記がなければ到底知りえない俘虜側の実態が記述されている。この点に注目して読んでみてほしい。

ドイツ在住の俘虜研究者 シュミット氏の解説

「この報告書は名古屋収容所の史実記録者であるヘルマン・フォイクトレンダー予備役情報将校が俘虜解放の少し前にまとめて書き上げた一連の報告文書の一つである。一連の報告書は1919年12月21日付けで東京にいたドイツ人牧師シュレーダー氏の手を経て密かに本国の家族のもとへ送られてきたものである。この報告書は昔のドイツ語古語フラクツアの筆記体で書かれているが、遺族の手で現代ドイツ語文字にタイプ印刷に打ち直して貰った。大変ありがたく感謝している。文書の公開は許可されている。」

フォイクトレンダーの報告書全文

「1919年5月5日に収容所長は、収容所内で製作した製品の展覧会を提案した。この種の展覧会は、他の収容所では既に開催されており大きな成果を得ていた⁴。この開催を動機づけることは簡単なことではなかった。俘虜になった最初の年からなにか活動をしよとしたが、その頃はどの活動も一切禁止されていた⁵。（展覧会のための）作業道具などの製作は一切禁止された。1917年（大正6年）の初頭になって収容所長の交代⁶があり、この時期から方針の変更があった。この時期はまだ働くだけの余力が残っており、名古屋の（日本人経営の）種々の事業所で自分達の技能や知識の活用を充分発揮することができた。またその労役（就労）は楽しみでもあった。また所内の庭作りや家畜飼育にも精が出た。そして講和条約は何時締結されるのか、はつきりしな

⁴：日本各地の俘虜製作品展覧会の開催期間と入場者数は、
板東収容所（1918年）3月18日～19日）44, 431名
久留米収容所（1918年）11月29日～12月5日）1, 681名（一般大衆入場不可）
青野原収容所（1918年12月14日～19日）約15, 000名
似島収容所（1919年3月4日～13日）163, 447名
名古屋収容所（1919年6月22日～30日）約103, 000名
上記は高橋輝和編著『丸亀ドイツ兵捕虜収容所物語』（えにし書房 2014年）210頁の記述による。但し青野原収容所の実際の開催日は1日繰上がり変更になったので、14日と記述した。この変更記述は、大津留 厚著『青野原俘虜収容所の世界』（山川出版社2007年）97頁の記述による。

⁵：大正3年（1914年）の年末に名古屋へ第一陣がきた。当初は3百名余であった。日本軍にとって早々の慣れない俘虜受け入れであったので、まずは規律厳守、厳しい監督運営が第一優先の業務だったことは想像に難くない

⁶：収容所長は大正6年8月林田一郎陸軍中佐から、中嶋銃之助陸軍大佐に交代した。

い日々が続いた。そのため展覧会の開催をどうしたらよいか考えてしまい、時期を失ってしまっただろう。いずれにしても以前から考えていた展覧会の可能性や目標はかなり縮小化され制限されそうだった。他の収容所が多く出品物を展示したようにはできそうにはなかった。つまり5月7日に収容所で掲示されたような内容⁷は期待できなくなった。準備時間は十分ではなく、間に合いそうになかった。むしろ主に考えられたことは小物の展示であった。例えば3円から5円位の価格帯のものである。この種の展示物（低価格の小物）を沢山揃えておくのがよいだろうということだった。さらに掲示には次のようなことが書いてあった。『今回はドイツ人の働きぶりとドイツ人の製作品を大規模に見せる最後のチャンスになるだろう。同時に製作品は売却するので大なり小なり所得をうることができる。また製作品を故郷への土産とすることもできる』と。

この呼びかけは皆を元気づけるものにはならなかった。僅か15件の申込がきただけだった。それらは大抵絵画か小さな木工製品や木製の彫刻品や焼き絵などであった。展覧会に反対する意見の主なものは、工作道具の値段が高いのでその資金がないこと、あるいは準備時間が少ない中で売店を介して購入していたのでは間に合わない材料もあると思った。（展覧会の最終の時期について収容所長は最初から6月の後半を指示していた）（カッコ内は原文通り）。主な障害は、ほぼ5年間にわたる長い俘虜生活で何事にも無関心になったことである。誰かが新しく思いついたことを言っても誰もとりあわないし、どんなことにも批判ばかりするか否定ばかりしていた。いつも相互に意見は対立していた。

しかし次第に展覧会への参加意欲がわいてきた。作る楽しみに目覚めてきた。（俘虜は展覧会のための組織や準備の心得を持っていた。）（カッコ内は原文通り）⁸。

⁷: この掲示の内容はわからないが、他の収容所がおこなっていたような、かなり大規模の展覧会を企画していたと推測できる。

⁸: 俘虜が無気力だった状態から次第に意欲をもつて展覧会の成功へと転換していく過程はこの報告書の最大のキーポイントであると思うが、「無気力状態から展覧会開催へ気力を充実させていく」その変化の具体的な説明がないのは大変残念である。俘虜生活に

収容所のあちこちで、お喋りが多くなり、製作品を叩く音は大きくなり、絵画や図案を描く風景は多くなった。収容所の事務所は今まで知らなかったほどの好意的な態度であることがわかった。名古屋の市中で購入できる許可や夕方の点呼の後でも展示品を製作するために労働できる許可やクレジットの配慮さえもしてくれた。このクレジットを配慮してくれたのは名古屋の「いとう呉服店」であった。それは工作器具の調達や原材料を購入するための300円相当のクレジットだった。クレジットの金額(300円)は展覧会の収益から後日返還した。最初の出品申出は15件だったが、最終的には120件に上り、ほぼ500点以上の品目の展示物になった。

展覧会のために商工会議所の部屋を無償で使用できた。展示物は「いとう呉服店」と他の1社(服部商店ウイーヴィングのこと、後の興和紡績や興和化学)のトラックが無償で提供された。これで製作品を会場まで運ぶことができた⁹。名

おける俘虜の無気力な状態についての説明はよくわかるので、それだけに逆に俘虜の心理的転換の様子や経過をもっと具体的に知りたい気持ちわいてくる。

⁹：「いとう呉服店と他の1社」と記述されている。まず「いとう呉服店」は、後の松坂屋百貨店であるが、当時の伊藤次郎左衛門守松(佑民)社長は国際的視野をもち慈善事業にも熱心だった。名古屋のドイツ兵俘虜は伊藤社長の恩恵を十分に受けていた。松坂屋少年音楽隊の演奏や百貨店めぐりでの歓待など、伊藤社長の存在は俘虜優遇の一助ともなった。収容所閉鎖後は、俘虜が使用していた東屋一棟を購入し、名古屋市覚王山の伊藤社長の別荘「楊貴荘」の山麓に移築した。現在は別荘地の縮小でなくなっている。一方「他の1社」とは「服部商店ウイーヴィング織物会社」で、後の興和紡績や興和化学である。当社のウイーヴィング工場は戦前ドイツ人技師カール・ワイスを雇用しドイツ製のスチーム・エンジンを輸入して運転操作を指導していた。青島戦で招集され俘虜となり、彼が久留米収容所にいることがわかった。会社は名古屋への異動を軍に要請し許可された。他社の工場にも出張して同じエンジンの設置と運転操作の指導をしていた。彼は話題の多い俘虜であった。当時シベリアのロシア軍に抑留されていたドイツ兵俘虜の中に彼の知人がおり、大変な困窮状態にあることを知った。名古屋収容所で義援金を集めたがそれが見つかり処罰された。彼の技師としての活動と義援金事件については、『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』第6号(2008年9月)9頁、23頁、24頁と25頁を。同じテーマで『ひがし』名古屋市東区郷土史研究会第12号(平成24年1

古屋の市電で展覧会場へ行く場合は無料で利用できた。

展覧会組織—展覧会の組織は間もなく我々俘虜の手に移された。収容所は日本国内の金融機関との連携を認めなかった。我々の活動は本来名誉のためだけのものので報酬を目指すものではない。展覧会活動は展覧会出品者達で行うことにし、規則に忠実に実行し機能を円滑に発揮できるようにした。

販売組織—10名の担当幹事と販売担当者を決め、5名の通訳を決めた。彼等は識別できるように色違いの腕章をつけた。各出品物には通しナンバーと価格がわかる二枚の札をつけた。販売員はこの札を外して購入者と一緒に会計担当者のもとへいく。会計が終わると領収書が渡される。購入者は展覧会の終了後その領収書でお目当ての品物を受け取る。次々と追加注文が舞い込み、ミシンの目が入った二通りの札に書き留められた。この札と交換に購入者達は品物を持ち帰る。すべて物品の売却は、追加注文でもそうだが、現金払いであった。他の収容所の展覧会もこの方法を採用していた。その方法は難しい問題を一度もおこすことはなかった。お金は会計係あるいは銀行で一時保管され、製作品が配布された後製作者に支払われた。追加注文の製作品の引渡には14日間(2週間)の期間が予定された。しかし次第に追加注文の数は増えてきたので、配達期限は4週間から6週間になり、さらに8週間(2か月間)に延ばされた。

会計事務—会計係は会議所の玄関ホールにおかれた。ここは展覧会場の入り口である。5名の会計係と記帳係がいた。相互に協力してあっていた。会計の事務は近代的な簿記の方式でおこなわれた。できるだけ簡単な処理を心がけたが、信頼に足る仕事できた。その日の収入は毎晩銀行へ振り込まれた。売却と会計課の指導監督は予備将校が担当していた。

ここで記述している組織(販売と会計)は、皆不慣れであったが官僚的な取扱方ではなく、集中力を発揮してできるだけ関係者の気持ちに添っていた。各組織は大変素晴らしい仕事をした。業務は円滑に運ばれた。

収容所ではドイツ語の展覧会の案内書を印刷発行していた。これは1冊50銭だった。日本語の簡単な一覧表は、1冊1円で売却し10,340冊が売れた。この売却の純益は経費の充足にあてられた。同様の方法で音楽プログラム

月) 29～30頁をご参照下さい。

がドイツ語と日本語のもので売られた。

経費は高くはならず、全部で約200円であった。プログラムの売却やその他の小額の収入でカバーできなくても、経費は展示品出品者の収入で調達された。展覧会の収入は約100円かそれ以上だった。

展覧会はいくつかの製品部門に分かれていた。絵画や各種の技術的な製作品などであるが、この技術的製作品とは器具、機械、模型、木工製品、玩具、織物やニットウェアなどのことを指す。展覧会は毎日9時から5時まで開館していた。毎日一度は軽食堂の部屋か商業会議所ホールで収容所楽団の演奏会がおこなわれた。それ以外に2回あった日曜日には、収容所合唱団の合唱がおこなわれた。コンサートにきた日本人聴衆は大変多かった。いつも多くの聴衆者は座る場所がなくなっていた。また毎日演奏会に来るリピーターも多かった。



展示された多数の絵画（名古屋市博物館所蔵）

拍手は大きく温かい気持ちがかめられていた。種々の音楽ジャンルの区別をそれぞれ理解して楽しんでいた。軽快な音楽、リズムのある音楽、優雅な音楽など、どの音楽演奏にも好感をもって聴いていた。

展覧会場の軽食堂の部屋では、ドイツ人（俘虜）が作ったお手製のパン、簡単な卵料理や肉料理、氷、レモネードなどが販売された。同じ館内では日本人商店の肉料理店、パン屋、喫茶ケーキ店が営業していた。これらの店ではドイツ兵俘虜がつくるドイツ風のものが用意されていた。特に製粉会社（日清製粉）とパン製造会社（シキマ・パン）の2社は、「ドイツ・パン」（白パンと粗

びき黒パン)と称して売っており、商品は飛ぶような売れ行きだった。軽食堂にいた会社と商店は展覧会の組織とは別のため、俘虜の展覧会組織とは関係なく独自の販売活動をしていた。これらの会社商店は自分達独自で値段付けした商品を販売して収入をえていた。彼等は相当高額の収入をえていたと思われるが、残念ながら確かめようはない。

展覧会初日の午前中に開催の式がおこなわれた。これには名古屋在住のドイツ人、ドイツ軍(俘虜)の将校団、展覧会出品者、収容所の代表、名古屋市民代表、名古屋の軍部代表と日本人招待客などが来館した。収容所合唱団と楽団は収容所でつくられたオルガンの演奏で会場を盛り上げた。合唱団と楽団は交互に演奏を披露していた。収容所長の中嶋大佐は俘虜の年齢、健康状態、学歴、職業、身長体重などについての統計的な資料をもとに講演し展覧会を盛り上げてくれた。

開催祝賀会の後で招待者達の展覧会の視察がおこなわれた。収容所長は在日のドイツ人に展覧会へ招待する文書を発送した。しかしこの発送文書は、俘虜達と訪問者達との間の会話ばかりでなく、挨拶することさえ禁止されたので実際には殆ど廃棄されたのも同様だった。この禁止令はある時にはゆるくなり、ある時には監視の目をすり抜ける形で、少数のドイツ人達ではあったが、彼等は希望通りの展覧会訪問を実現させた。今ここで過ごした時のことを快く思い出すことができる。

展覧会来訪ドイツ人

当日次の在日ドイツ人達が展覧会場へ来てくれた。(※印は筆者挿入)

ヘルマン・ヘルフリッシ夫妻(Herr und Frau Herrmann Helfrisch) 名古屋在住(※旧制第八高等学校のドイツ語教師)

カルル・ホス氏(Herr Karl Voss) 名古屋在住(※名古屋市東区の貿易会社ウインケル商社社員)

ハーン博士(Herr Dr.Hahn) 名古屋在住(※旧制第八高等学校と旧制愛知医学専門学校のドイツ語教師)

ヴュルフェル教授(Herr Professor Dr. Wuerfel) 仙台在住(※旧制第二高等学校のドイツ語教師)

シュレーダー牧師(Herr Pfarrer Schroeder) 東京在住(※新教牧師)

H. ハンセン氏 (H.Hansen) 横浜在住 (*推測=貿易商社社員)

展覧会の最終結果と決算記録:

| | |
|-----------------------|----------|
| 9日間の訪問入場者数 | 約93,000人 |
| 一日当たりの最高訪問入場者数(6月29日) | 約19,200人 |
| 展示者数(俘虜) | 約120人 |
| 税込み収益総計額 | 約4,200円 |
| 展示者への支払額 | 約3,300円 |
| 出費額 | 約212円 |

まとめていえば展覧会については満足して振り返ることができよう。展覧会に直結した活動と体験は退屈な俘虜生活に刺激をあたえ好ましい気分転換になった。そして俘虜達は平和条約の締結で沈んだ気持ちになったり無用な心配をしていたが、展覧会の活動はこれらの思いや心配を拭い去ってくれた。そんな気分の中で収入を得られたことは特によかった。日本人の購買意欲は大変大きかった。俘虜が作製した製品をもつことが恰も流行のようにさえみえた。製品の価格は決して控えめの価格ではなかったが、よく売れた。ごく僅かな例外はあったが需要は供給を上回った。製作のためにもっと沢山の時間を要する製作品や展覧期間中に追加注文された製作品については、さらに数倍の売上げを見込むことができたのではないかと。とりわけ絵画の注文は多かったが、残念ながらその絵の価値は必ずしも表示価格や受け取った金額と一致するものではないと、いわざるをえなかった。多くの購入者の好みには「変わったものであればあるほどよいものだ」という考えがあつて、希望価格以上の値段にせり上がってしまった。一般の人には興味はもたれないが、専門家の目から見ると、展示物の中には別の関心をひくものがあった。それはエンジン・モーターや自動車の構造設計図、パンの窯のスケッチ、家屋の様々な種類や大小の大きさのスケッチや詳細な図面である。このようにこの展覧会はおそらく文化的な視点から見ても決して意味のないものではなかった。そしてこの展覧会は、たとえ限られた範囲とはいえ日独両国民が相互によりよく認識しあい理解しあうことを学んだ。ドイツ人(俘虜)と日本人との間で常によい関係が続いた。憎しみの兆しやそれに類した気持ちどころか、それとは反対に友好的で人間的な気持ちが

見てとれた。千人以上の児童生徒がクラスごと教師に引率されて展覧会を見学にきた。同様に陸軍幼年学校生徒や高校大学の学生達、それに軍人や軍隊の関係者達も来てくれた。

収容所長の中嶋大佐には心からお礼を申し上げたい。彼は展覧会開催の意思と実現する見通しをつくってくれた。他の場合と同様に我々のために何をしたらよいか、我々の気持ちをよく理解していた。残念なことであったが、我々への好意があったのにも拘らず、展覧会開催中も日本側との円滑な共同活動がなされなかったことである。大抵は我々の側に責任があった。非常識な見の狭さや人を卑下する身勝手な若者達や人間性に欠ける将校達の故意の悪気の結果である¹⁰。こういう不愉快なことはいつものことではないが、これを除けばこの展覧会の時期は全ての参加者にとって日本での俘虜生活5年間の中での一条の光になったし、今もそうになっている。」

以上がフォイクトレンダーの大正8年6月の俘虜製作品展覧会についての報告の全文である。

フォイクトレンダー報告の意義

上記がフォイクトレンダーの報告である。当初は「やる気がなく」「イヤイヤ」だったが、収容所側の事務繁忙の解決策から展覧会が企画されると、俘虜側はその企画の指示に従って展覧会の準備にとりかかった。しかし徐々に「やる気」をおこし、「意欲を出して」、日常の退屈感を忘れ、自主的な組織行動で展覧会を成功させた。バックには収容所の外の日本企業の応援もあった。フォイクトレンダーは収容所での俘虜の心理的状況の様子と変化を語っている。この点については日本側の記録では「全く」といってよいくらいわからなかった。この点（心理的変化）についての軍の記録はない。日本側で気がつかなかった極めて重要な指摘である。俘虜側でないとわからない俘虜の気持ち

¹⁰: この報告書の筆者フォイクトレンダーの率直な陳謝の表明には印象深いものがあるが、彼がここでいう俘虜のマイナスの行為は具体的に何を指しているのかはわからない。

である。

ほぼ5年間におよぶ長い抑留生活で精神的に無気力になり、何事にも無関心になり、自発的好奇心や意欲がなくなり、他を批判するだけの心理状態になったと、彼は率直に明らかにしている。そもそもこの展覧会は帰国が近い時期に市民が見学見舞などで収容所へおしよせ、収容所の日常業務が繁忙さを増してきた。それを解決するために思いついた展覧会ではあった。しかし展覧会を契機に意気消沈していた俘虜が息を吹き返したように元気になり、意欲満々眼前の展覧会の行事を成功に導いた。この辺の事情は日本側が書いた『業務報告書』や当時のマスコミである日刊新聞からは読み取れない盲点だった。まずはこの点でのフォイクトレンダー報告の指摘に注目しておきたい。

次に報告の末尾で彼は展覧会の最中に俘虜が見識な行動をとっていたことを正直に明らかにし、率直に陳謝と反省の気持ちを表明していることに注目したい。日本側の記録からはわからない領域であるばかりか、その事実についての彼の卒直な「情報公開」といえる。しかも身内のマイナスの行為についての「自白」に感心せざるをえない。

この報告は事実の表明、時に「暴露」を正直にしていることと、そのことについての釈明と陳謝をしていることに関心をよせたい。ドイツ側の言動に自らマイナスを指摘した報告や研究は筆者が浅学のこともあるが、あまりお目にかからない。逆にドイツ側の研究報告には、日本側が非人間主義的な取扱をしたという指摘報告が目立つこともある¹¹。その点でこのフォイクトレンダーの報告は印象深い。

.....

シュミット氏のインターネットのサイトでは、展覧会場での展示品と製作者のリストを紹介しているので、次に紹介する。

工業技術分野の展示品リスト～大正8年6月の展覧会～

¹¹：『青島戦ドイツ兵俘虜収容所 研究』第4号の拙稿「名古屋俘虜収容所 覚書 Ⅲ」の中の「俘虜達の印象記」56頁～63頁 をご参照下さい。

大正8年6月の俘虜製作品展覧会は、展示品の中でも彼らが情熱をもって製作し、見る側の日本人に強い感動と高い関心を与えた品目が、工業技術分野の製品であった。

ドイツ在住の青島戦ドイツ兵俘虜研究者のシュミット氏は、下記の一覧表の表示に先立って次のように感想を述べている。「広範囲にわたった技術面の展示は、俘虜の多くが名古屋やその周辺の企業で就労することに大いに役立ったであろう。おそらく（この分野の）展示によって、住民の多くが展示会場を訪問者することになったであろう」と。以下のリストでは、シュミット氏提供のリスト以外に当日会場で配布されたパンフも参考にした。特に人名については、当日のパンフ *Ausstellung von Arbeiten deutscher Kriegsgefangener des Lagers Nagoya* 中の *Technische Zeichnungen* を参考にした。これは提出者名と提出品名との照合に役立った。

工業技術図面 (Technische Zeichnungen)

- (1) 展示品提出者： **Broehl, Josef** (提出品番号：No. 69～75)
別荘、市街地住宅、熱帯地帯の住宅、小型と大型住宅などの設計図
- (2) 展示品提出者： **Hafels, Ernst**(提出品番号：No. 76～77)
バウエルト・ユンカーの100馬力ディーゼルモーターの図表と図面
日本車両製造(株)に提案した40馬力荷物運搬モーターと見積書(12頁)
- (3) 展示品提出者： **Weis, Emil** (提出品番号：78～85)
ランツ式200馬力逆冷却装置の文書。4頁
12気圧4000リッター汲上能力のボイラー給水ポンプ。4頁で写真あり
6000kg重量の上昇能力をもつ石炭エレベーター。3頁で2枚の写真あり
蒸気による沸騰一排出装置。2頁で写真2枚 / ベルト張力の機能(Lenix-Getriebe) 2枚と写真1枚
オイル清浄機(50%以上のオイル節約能力) 1頁 写真2枚 乾燥機1頁
日清製粉(名古屋)にパン焼き釜の設置 6頁
- (4) 展示品提出者： **Knibbe, Paul**(提出番号：85a～85b)

洗濯機 1頁 パン粉ねり機 1頁

2. 器具、機械、モデル

- (1) 展示品提出者：**Behrens, Heinrich Johannes Thies**(提出品番号：86)

帆走ヨットの模型 長さ1m10cm

- (2) 展示品提出者：**Buchmann, August** (提出品番号：87/88)

婦人用かつら (ドイツドラマ上演用) 2つ

- (3) 展示品提出者：**Conrad, Max** (提出品番号：89/90)

写真引延機 縮小拡大器具

- (4) 展示品提出者：**Dehen, Franz**(提出品番号：91)

コンサート用楽器チッター (収容所で製作)

- (5) 展示品提出者：**Duennebell, Paul** (提出品番号：92/93)

収容所の演劇舞台と収容所の施設のモデル (将校用庭園)

- (6) 展示品提出者：**Dwillat, Franz** (提出者番号：94)

1気筒蒸気エンジン・シリンダー (シリンダーの穿孔距離30ミリで気筒内のピストンの作動距離48ミリ)

- (7) 展示品提出者：**Ebert, Paul** (提出者番号：95/96)

企業設置用の発電機 設置器具を安定させるための鉄製の安定用板



展示されたヨットの模型 (名古屋博物館所蔵)

(8) 展示品提出者：Froehlich,Josef (提出者番号：97)

一世帯用のラビット式コンクリート製住宅のモデル

(9) 展示品提出者：Gillisch,Walter: (提出者番号：98)

空気圧縮式オルガン (管状送風装置付き) で円錐形鎧戸、手鍵盤、ペダル付き

(10) 展示品提出者：Hafels,Ernst (提出番号：99)

時間当たり4立法メートルの能力の遠心ポンプで、コンベアーの高さ20cm.

(11) 展示品提出者：Heidrich,Johannes(提出番号：100/101)

蒸気ハンマー (モデル)

蹄鉄の装飾額縁

(12) 展示品提出者：Heiderich,Johannes(提出者番号：102/103/104)

印刷機

各種の絵葉書

木製鉛版



収容所内での演劇の上演風景 女装した髪も展覧会で展示された

(名古屋市市政資料館所蔵)

(13) 展示品提出者：Hornung, Ernst Rudolf(提出者番号：105/106/107)

実物の頭髪で作られた3つの人形のかつら

(14) 展示品提出者：Huben, Heinrich / Milde, Max / Senkbeil, Wilhelm
(提出者番号108)

冶金等で重量測定のためのメートル法による秤(名古屋の「旭金メッキ」にガルバー式の秤設備を設置するため)

(15) 展示品提出者：Janson, Rudolf Hermann (提出者番号：109)

陶磁器製の人間の頭を製作(人種別や形態別など)

(16) 展示品提出者：Jung, Josef(提出者番号：110)

工場で使用可能な蒸気機関(モデル)

(17) 展示品提出者：Kaschull, Emil(提出者番号：111)

下置台のあるボトルシップ 20隻

(18) 展示品提出者：Klar, Paul (提出者番号：112)

家庭用の洗濯機(モデル)

(19) 展示品提出者：Linger, August (提出者番号：113)

企業で実用可能な機械各種：凸版印刷機、照明機器、機械室、発電機

(20) 展示品提出者：Reiser, Friedrich(提出者番号：114/115)

配電盤付き直流発電機

照明設備付き交流発電機

(21) 展示品提出者：Seibt, Hugo (提出者番号：116)

S. M. S魚雷艇のS90の木製モデル

(22) 展示品提出者：Weis, Karl (提出者番号：117/118/119)¹²

運転カーブ付き蒸気圧記録計器

直径70ミリのポールベアリング付きの二つの圧延機

¹² 上記(22)のカール・ワイス(Weis, Karl)の展示品については、上記の出品物を含めて「全部で11件のもの」を出品していたという記録がある。『ドイツ兵捕虜とスポーツ 一久留米俘虜収容所 III一』(久留米市文化財調査報告書第213集)2005年3月142頁

- (23) 展示品提出者：Wetzel,Richard / Besau,Jakob (提出者番号：120)
 弁コントロールによる高圧と低圧の蒸気機関
 6気圧1馬力の管状ボイラー
- (24) 展示品提出者：Winne,Paul (提出者番号：121)
 通常の装備をした回転木馬
- (25) 展示品提出者：Wirks,Paul (提出者番号：122)
 単葉機の飛行機のモデルで、圧縮空気による5つのシリンダーが回転
- (26) 展示品提出者：Zapf,Hermann (提出者番号：123)
 室内向きの噴水
- (27) 展示品提出者：Zimny,Franz (提出者番号：123a/123b)
 a 芝生用散水機
 b 芝生用散水機
- (28) 展示品提出者：Knibbe,Paul (提出者番号：123c)
 縦置き型暖房用ボイラー
-

あとがき

青島戦の俘虜の製作品展覧会は、各收容所で開催されておりそれぞれに成果をあげた。共通しているプラスの効果は、程度の差はあれ俘虜の無為の日常の退屈感や無力感を解消し、生活に充実感とエネルギーを吹き込んだことは、名古屋だけの話ではなく、他の收容所でも同様であったのではないだろうか。そして当時近代化を急ぐ日本の官民にドイツの先進的な科学技術の見本となつたし、また芸術の面でもドイツの音楽や趣の違う絵画や模型、日用品の展示物は大きな印象と感銘をあたえた。展示物の見学鑑賞は、一部当局の幹部レベルにとどまらず、一般市民の各階層を楽しませ、学習させたことにも大きな意義があった。

各收容所の展覧会場はほぼ共通の一定の成果と影響を与えたが、その一方收容所の間で相違することもあった。その1つが展覧会開催の動機であった。名古屋の場合は、收容所の業務の繁忙さを緩和するために收容所が企画した。そ

の結果は俘虜の退屈感や無気力の日常をプラスの方向に転換できたと、俘虜のフォイクトレンダーという。このプラス効果は各收容所とも同様だったと考えたいがどうであったか。

徳島收容所の事例について井戸慶治氏はその開催の動機について次の3点をあげている。1つは俘虜が精神不安定から不測の事態を惹起するのを防止するためだった。2つ目は日本の企業や教育界がドイツの先進的な技術を認知し学習できるチャンスになった。3つ目は製作品販売によって俘虜自身の収入となることをあげている¹³。

この3点のうち後者の2点は名古屋と共通している。徳島の最初の「不測事態予防のため」という点は、名古屋にはなかった。名古屋の展覧会開催の動機は、收容所の繁忙緩和のためということであったと、收容所の『業務報告書』で証言している。徳島の場合は、不穏な空気を予感した收容所が秩序と規律の維持のためだったと説明されている。これで見ると展覧会開催の動機は、名古屋の場合**收容所の繁忙解消**というところから企画され実施を布告された。徳島の場合は、不穏な空気を予感した收容所が**秩序と規律維持の観点から**その動機になったと理解してよかろう。展覧会開催の指示は、両者とも同じく收容所であった。しかし動機の点で両者の間には相違があったといえる。名古屋だけについていえば俘虜の間では当初は嫌気充分だったが、開催の布告後はその気になり精神状態は目的意識に目覚め活性化していったという。その点は名古屋独特の特徴なのか。他の收容所にも同様の事例があったのか。関心が向くところである。しかしフォイクトレンダー報告は、俘虜の立場から正直にその経過を表明していることは、貴重な証言だと認識している。

名古屋俘虜收容所業務報告書は、開催の動機を、見学者、見舞客や慰問客の来訪が激しくなり、收容所事務方の業務が繁忙し困惑しており、これを緩和するために「展覧会を開く」としている。一見恰好のよくない言い訳に聞こえるが、これも正直な事実の開陳である。それなりによくわかる説明であるし好感がもてる。

收容所間の管理運営上の相違について今回の展覧会を含めて全般的に言え

¹³ 井戸慶治：「徳島・板東におけるドイツ兵俘虜の展覧会」『青島戦ドイツ兵俘虜收容所研究』第11号2014年3月 所収 22～23頁

ば、さらに慎重な分析が必要だと思うが、まずは収容所が所在した場所、環境のウエイトが大きいと考えられる。具体的に言えば、収容所と直属の衛戍司令部との関係、さらに敷衍して言えば収容所と陸軍省との関係である。この場合収容所長の意思や性格あるいは判断や解釈の結果など、一概に論ぜられない問題はあろう。

名古屋の例で言えば直ぐに思いつくのが、「いとう呉服店」の少年音楽隊の音楽指導や中京音楽会代表の安田俊高氏の公開音楽会の開催の要望である。名古屋の場合はいずれの場合も俘虜収容所の規則に基づいて衛戍司令部経由で陸軍省に申請している。前者（いとう呉服店）の場合は「使役スルニ適当ナラザル旨告ゲタリ」と申請書にペン書きしてある¹⁴。後者の場合（公開音楽会の開催要請）は「目立たないやり方ならよろしい」という回答であった。不承認（拒否）や消極的承認の理由は書いてない¹⁵。

これら不承認（拒否）などの要因をたどれば、軍部が音楽など芸術は「何ら益なし」という認識があったためか。あるいは民衆と俘虜との接触を防止するためだったのか。その両方だったのか。名古屋の場合も収容所長レベルの許可だけですませて、陸軍省へは上申しないで開催できたのか。名古屋俘虜収容所の「服務規則」は、その第11条で「所長ハ旬報ヲ以テ収容所ノ状況ヲ衛戍司令官ニ報告スベシ」と決めてある。もし報告を怠った場合は処罰の対象となる¹⁶。

その一方徳島のエンゲル楽団についての南川慶二氏の本紙第12号に掲載された論文では、俘虜研究者林啓介氏の著書を紹介しながら、「初めて見る西洋楽器の響きに触れた青年たちは自分たちも演奏してみたくなり、俘虜から指導を受けたいと松江所長に願い出た。その結果、許可を得てエンゲルが指導することになった」¹⁷と書かれている。

久留米収容所にいた俘虜エーリヒ・フィッシャー（予備役下士官で演奏家）

¹⁴ 欧受第1348号 大正5年10月5日名古屋衛戍司令部大庭二郎申請 陸軍大臣大島健一宛「私人俘虜使役ノ件上申」

¹⁵ 欧受第281号 大正8年2月22日留守第三師団参謀長岡野耕一申請 俘虜情報局長白川義則宛「独逸俘虜ノ音楽聴取方ノ件ニ付照会」

¹⁶ 欧受第1668号 大正3年11月19日「俘虜収容所服務規則ノ件報告」名古屋衛戍司令官仙波太郎宛 陸軍大臣岡市之助宛

¹⁷ 南川慶二「報告：よみがえった『徳島エンゲル楽団』—エンゲル・松江記念音楽祭15年間のあゆみ」青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究 第12号 2015年3月 所収 50頁

は、彼の日誌で久留米の公開音楽会の経緯の一部を記述している。日誌の本旨を要約して紹介すると、「長い間久留米でコンサートを開催する話があったが、師団と軍国主義者（本文の記述通り）が俘虜と民間人の希望と努力のすべてに『ノー』の対応をしてきた。しかしやっと収容所長にこの嵐が届いたらしい。昨日（大正8年12月3日）の午後2時にそこの講堂（久留米高等女学校）でおこなわれた。」これが有名なベートーベン演奏会だったが、場所と聴衆を特定し非公開とした演奏会であった。帰国を目前とした大正8年12月21日の日記には市内の劇場で公演したことを書いている。「僕らは三回上演した。一昨日（12/19日・金）、昨日（12/20日・土）、今日（12/21日・日）だ。劇場（恵比寿座）には2,500人ぐらい来た。」会場には市長も挨拶にきた。公演会ではピアノ演奏などドイツ音楽ばかりでなく、風俗劇、幕間演芸、南ドイツの靴踊りなども披露され、大きな拍手と喝采をえたと書いている。本人は日記に「この世界の果てでドイツ音楽が尊敬され奨励されているのを見ると、・・・僕らは自分自身に疑いを持つことはないのだ。また（未来は）よくなるだろう」と¹⁸。この下士官俘虜の真正直な気持ちが読み取れて興味深い。

名古屋の例とは相異なる事例である。収容所間での相違については今後の課題だと思うがどうか。しかし俘虜製作品展覧会は、総じて各収容所とも共通して同様にドイツと日本ともそれぞれ独特の成果を得たことは、俘虜収容所の歴史のなかでも貴重な体験だったし、深く記憶に留めるべき行事だったといえよう。拙稿を閉じるにあたって、本題の俘虜製作品展覧会からやや範囲をこえた一部余分と思えるテーマ（例：公開音楽会）にまで論が及んだ面もあったかと危惧するが、筆者の従来からの問題意識の余波でもあるので、この際にご容赦願いたい。他の収容所との比較は、当時の状況を知るうえでよいヒントになるし、実態把握に役立つ。まだ隠された全国の収容所の動静があると思われるが、その実態が徐々にでも解明されてくることを期待したい。

最後まで拙稿をお読み頂いたことに感謝の意を表します。（おわり）

¹⁸ エーリヒ・フィッシャー「フィッシャー回想録」『ドイツ兵捕虜と収容生活—久留米俘虜収容所 IV—』（久留米市文化財調査報告書第251集）2007年3月 久留米市教育委員会 53～56頁

※ この原稿は印刷に出す直前の最終稿ですが、印刷業者の都合により、出来上がった雑誌の現物と、ページや行が微妙にずれています。したがって、ここから引用する際の正確な出所表示については、雑誌現物の方に依拠していただきますよう、お願いします。